Research Monograph Series

共存在の生成論
縦軸としての存在、横軸としての共感覚、そして失われた現在

The Generative Theory of Co-Being: Existence as the Vertical Axis, Co-Sensibility as the Horizontal Axis, and the Lost Present

Author: Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
ORCID: https://orcid.org/0009-0009-3796-5889
Affiliation: Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics
Version: 1.0
Last Updated: July 2026
Status: Ongoing Research

Research Monograph
Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha)
Version 1.0, July 2026

Publication Information

Copyright

© 2026 Tomokazu Tanaka (bigakusha-haha). All rights reserved.

License

This work is distributed as a Research Monograph.

No part of this publication may be reproduced, distributed, or transmitted in any form or by any means without prior written permission of the author, except for brief quotations used in academic review or scholarly citation.

Suggested Citation

Tanaka, Tomokazu (bigakusha-haha). 2026.

The Generative Theory of Co-Being:
Existence as the Vertical Axis, Co-Sensibility as the Horizontal Axis, and the Lost Present

Research Monograph Series, Version 1.0.

Sayama Aesthetics School / Institute of Aesthetics.

Research Monograph

Version: 1.0

Last Updated: July 2026

Status: Ongoing Research

要旨

本論文の目的は、「存在」と「共存在」の差異を、生成学の立場から縦軸と横軸の交差として再構成し、現代における自己存在への不信が、共存在的現在の喪失から生じていることを明らかにすることである。本論文では、「存」を時間的持続、「在」を具体的な現前と位置、「共」を差異を保持した関係的分有として定義する。このとき存在は、自己が過去・現在・未来を通じて自らの根拠と可能性を問う縦方向の運動であり、共存在は、自己が同時代の他者、自然、事物、場所、死者および未来から触発される横方向の運動である。「在」は両軸の固定的な交点ではなく、そのつど生成する位相的インターフェイスとして理解される。

本論文はさらに、科学そのものと科学主義を区別する。批判の対象となる科学主義とは、局所的で線形的な因果関係によって測定・再現・説明できるものだけを実在として承認する認識上の排他性である。この排他性は、不可視なもの、遠隔的なもの、理解不能なもの、死者、未来、場所の力といった関係を非実在化し、人間の感覚を孤立した機能へ分解する。その結果として生じるのが、知的位相ロックと対をなす「感性的位相ロック」である。

ラスコー洞窟の壁画、教会の装飾、儀礼、祈り、グラフィティ、Web Installation、民宿狭山美学校を同一の歴史的目的へ還元することはできない。しかし、それらは生成学の観点から、「ここ」と「ここではない場所」、「いま」と「いまではない時間」、可視と不可視、理解可能なものと理解不能なものを接続するインターフェイスとして比較できる。芸術は不可視なものを完全に可視化するのではなく、不可視なものが不可視なまま現在に作用する席を生成する。本論文は、この働きを共存在的現在の再生成として位置づける。結論として、現代人が自己の存在を信じられなくなったのは、自己について考える能力を失ったためではなく、自己以外と共に在ることを感じる横軸を失ったためである、と論じる。

キーワード

生成学、生成の位相存在論、共存在、存在、共感覚、感性的位相ロック、知的位相ロック、非局所性、インターフェイス芸術、科学主義、現在、無名性、作品性

目次

Contents

方法論的序論……1

1. 問題設定 情報過剰のなかで失われる共存在……2

2. 存・在・共の概念的分節……3

3. 存在の縦軸と共存在の横軸……4

4. 共存から共存在へ……5

5. 科学と科学主義 局所的因果の絶対化……6

6. 芸術・儀礼・非局所的通信……7

7. 見えるもの、見えないもの、理解できるもの、理解できないもの……8

8. 共感覚の再定義と感性的位相ロック……9

9. 個人主義的な縦軸への収縮……10

10. 自己外部化、人間以前性、自己以前性……11

11. 言語デリバティブ空間と失われた現在……12

12. 即・座・席・位としての共存在……13

13. 無名性と作品性……14

14. 芸術による共存在的現在の再生成……15

15. 生成学における共存在の命題……16

結論……17

参考文献……18

方法論的声明……20

方法論的序論

本論文は、漢字の歴史的語源を確定する文献学的研究ではない。「存」「在」「共」という語の分節は、生成学における概念的操作であり、存在がどのような関係を通じて生成するかを記述するための方法である。また、前近代の洞窟壁画や宗教空間を、現代美術の直接的な起源として単線的に位置づけるものでもない。とりわけラスコー洞窟の壁画については、その目的を単一の呪術的・儀礼的機能へ断定できない。本論文が注目するのは、複数の歴史的実践に見いだされる、現前していないものとの関係を空間的・身体的に生成する構造である。

ここでいう「非局所性」も、量子物理学上の非局所性を人間文化へ直接転用するものではない。生成学における非局所性とは、存在の意味と作用が、その存在者の物理的位置だけでは完結せず、離れた場所、異なる時間、他者、記憶、未来の可能性との関係によって生成することを指す。したがって本論文は、物理学的証明ではなく、存在論的・美学的な構造記述を行う。

本論文は、美学者母が展開してきた生成学を全体的枠組みとし、生成の位相存在論をその基礎存在論として用いる。さらに、自己外部化、インターフェイス存在論、人間以前性と自己以前性、言語デリバティブ論、即、座、席、位、無名性、作品性という既往概念を、共存在の問題へ統合する。

1. 問題設定　情報過剰のなかで失われる共存在

現代社会では、遠方の戦争、災害、死、生活、歓喜がほぼ即時に画面へ到達する。人間は以前より多くの出来事を知り、より遠くの他者を視覚的に確認できるようになった。それにもかかわらず、「いまこの瞬間にも、どこかで、誰かが、何かと共に生きている」という感覚は強まったとは言い難い。むしろ情報への接触が増えるほど、個々の出来事が持つ身体、場所、時間、重さは均質な表示面へ圧縮される。

ここには、知ることと共に在ることの決定的な差がある。出来事についての情報を所有することは、その出来事に関係づけられていることを意味しない。画像を見たこと、説明を理解したこと、賛否を表明したことは、それだけでは共存在を成立させない。共存在とは、対象を自分の認識の内部へ回収することではなく、自分には回収しきれない他者の存在によって、自らの現在が変化しうる状態である。

したがって現代の危機は、単なる共感不足ではない。より根底には、共感を可能にしていた存在論的条件、すなわち、異なる存在が異なるまま一つの現在を分有しているという感覚の喪失がある。本論文はこれを「共存在的現在の喪失」と呼ぶ。

2. 存・在・共の概念的分節

2.1 存　時間を通じた保持

「存」は、あるものが消滅せず、時間を通じて保たれる働きを示す。ここには過去から現在への継承と、現在から未来への持続可能性が含まれる。しかし存は、固定的同一性の保存ではない。生成学において持続する存在は、変化しない実体ではなく、関係の変化を引き受けながら接続可能性を維持する構造である。

したがって存とは、同じ内容が保存されることではなく、変化のなかでなお継承可能であることである。記憶、履歴、習慣、名前、制度は存を支えるが、同時に存在を既成の自己像へ閉じ込めることもある。存には、継承を可能にする力と、生成を固定化する力の双方がある。

2.2 在　いま・ここにおける現前

「在」は、抽象的な持続ではなく、存在がいま・ここに具体的な位置を占めて現れることを示す。在は単なる座標ではない。身体が環境に触れ、他者の視線を受け、事物に支えられ、ある場所に応答することによって成立する位置である。

この意味で在は、縦軸と横軸の交点である。ただし、その交点はあらかじめ定められていない。過去の意味が変わり、他者との関係が変わり、未来の可能性が開閉するたびに、在の位置も移動する。在とは固定された点ではなく、存在がそのつど現実に接地する生成的な位である。

2.3 共　差異を保った分有

「共」は、複数の存在が同じであることを意味しない。また、個体が完成した後に付け加えられる外的な連帯でもない。共とは、異なる存在が差異を消さずに、同じ世界、時間、場所、問題を分有する関係である。

共は融合ではなく、かさなりである。かさなりにおいて、それぞれの存在は完全には一致せず、相互に還元されない。しかし、互いの存在によって自己の位置と可能性が変化する。したがって共存在とは、複数の完成した存在者が並置される状態ではなく、共にあることによって各存在が生成する出来事である。

3. 存在の縦軸と共存在の横軸

存在の縦軸は、過去・現在・未来を通じて自己の根拠と可能性を問う運動である。「私は何者であったか」「私は何者であるか」「私は何者になりうるか」という問いは、時間的な連続と断絶を縦方向に組織する。思考は概念化、回想、予測、自己証明によって、この縦軸を形成する。

これに対し、共存在の横軸は、「私は誰と、どこで、何と共にあるのか」を感受する運動である。それは同じ時代を生きる他者だけでなく、自然、動物、事物、技術、言語、場所、死者、まだ生まれていない者を含む。感性は、それらを完全に理解する以前に、それらから触れられ、自らの位置が動かされていることを受け取る。

ゆえに、存在は思考、共存在は感性に対応する。しかしこの対応は二元論ではない。感性を欠いた思考は、現実に接地しない抽象へ収縮する。思考を欠いた感性は、経験を継承し、差異を言葉にし、未来へ渡す力を失う。感性は横軸から存在を開き、思考は縦軸によって共存在を継承する。

両軸が交差する場所が「現在」である。現在は時間の流れのなかの無限小の点ではない。それは、過去から受け継いだものと、自己以外から到来するものと、まだ実現していない未来とが接続されるインターフェイスである。現在とは最新情報ではなく、自己以外に対して、いま応答しうる場所である。

4. 共存から共存在へ

「共存」は、すでに成立した複数の存在者が同じ環境に存在する状態として理解されやすい。この理解では、まず個人があり、その後に関係が生じる。これに対し「共存在」は、関係を存在に先立つ条件として捉える。自己はまず単独で存在し、その後に他者と接続するのではない。他者、自然、言語、文化、場所との関係のなかから、自己として分節される。

この命題は、生成の位相存在論の関係先行性と一致する。存在とは閉じた実体ではなく、接続可能性としての開いた位相である。自己と他者は、最初から完全に分離された二者ではない。関係のなかで境界が生成され、その境界が動くことによって自己と他者が更新される。

したがって共存在とは、存在者の複数性ではなく、存在生成の根源的な複数性である。共存在は、「私も他者も存在する」という判断より前に、「他者との関係なしには私の在が成立しない」という構造を示す。

5. 科学と科学主義　局所的因果の絶対化

本論文の議論は反科学ではない。科学は、世界に対する重要な検証方法であり、現代科学の内部にも、非線形性、創発、相互依存、観測と系の関係、複雑な生態学的連関を扱う研究が存在する。本論文が問題とするのは科学ではなく、特定の科学的方法を実在判断の唯一の基準へ拡張する科学主義である。

科学主義的合理性は、対象を限定し、条件を統制し、局所的な原因と結果を対応させることで説明可能性を高める。この方法は実験と予測に大きな力を持つ。しかし、その局所的有効性を存在全体へ適用すると、測定できない関係、再現できない一回性、説明に回収できない感覚、長い時間を通じた文化的継承が非実在化される。

局所的因果は「この原因がこの結果を生んだ」と境界を定める。だが、ある言葉が遠くの他者の行為を変え、過去の死者が現在の判断へ作用し、まだ存在しない未来像が現在の制度を組織する場合、その作用は単一の現在地点へ閉じない。生成学は、これらを超自然的因果として主張するのではなく、意味、記憶、予期、形式、媒介を通じた非局所的な存在生成として捉える。

科学主義の問題は、理解できる領域を拡大することではない。理解できないものを存在しないものとして処理し、説明できるものだけで世界を閉じることにある。この閉鎖が、科学主義的な知的位相ロックを生む。そこでは、既存の合理性を疑うこと自体が非合理と判定され、合理性の外部を感受する契機が失われる。

6. 芸術・儀礼・非局所的通信

洞窟壁画、宗教建築、儀礼、祈りを、現代的な意味での美術鑑賞へ還元することはできない。ラスコー洞窟の壁画についても、その用途には複数の解釈があり、狩猟呪術だけで説明することはできない。それでも、洞窟の闇、身体の移動、動物像、反響する音、火の揺らぎが、日常的空間とは異なる関係の場を形成していたと考えることはできる。重要なのは、描かれた像が単なる対象の複製ではなく、人間、動物、生、死、記憶、予期を接続しうる媒介だったという構造的可能性である。

教会における壁画、彫刻、聖像、ステンドグラス、光、音響、香りも、単なる装飾ではない。それらは、読解可能な物語を示すと同時に、地上と天上、生者と死者、個人と共同体、可視と不可視を身体的に接続する空間を生成した。装飾は建築に追加された表面ではなく、建築を遠隔との通信環境へ変えるインターフェイスであった。

ここでいう通信は、情報を正確に送受信することだけを意味しない。それは、直接現前していないものが、像、痕跡、物、音、場所を介して現在に作用することである。通信の相手は遠くの生者に限られない。死者、祖先、神、動物、自然、未来の他者、名づけられていない何かも含まれる。

芸術は、見えないものを完全に見えるものへ変えるのではない。そうすれば不可視なものは、可視化された情報へ回収されてしまう。芸術の働きは、見えないものが見えないまま、理解できないものが理解できないまま、それでも現在に作用できる席を開くことである。

7. 見えるもの、見えないもの、理解できるもの、理解できないもの

近代的認識は、見る主体と見られる対象を分け、明晰に対象化できることを知の条件としてきた。しかし、見るという行為そのものが、身体、距離、光、記憶、期待、他者の視線に依存している。可視性は孤立した視覚の機能ではなく、不可視な条件に支えられた関係的出来事である。

同様に、理解できるものは、理解できないものとの境界によって成立する。すべてが完全に理解されたなら、新しい問いも応答も生じない。理解不能性は知の欠陥ではなく、他者が自己へ還元されないための条件である。生成学において、理解とは未知を消去することではなく、理解できないものとの接続を維持しながら、自らの位置を変えることである。

この観点から、共感は他者の感情を同一の形で所有することではない。「私はあなたを完全に理解した」という宣言は、他者の固有性を自己の理解へ回収する危険を持つ。共感の根底に必要なのは、理解できない他者が、いま自分と同じ世界に在ることを認め、その現れによって自らが動かされうることである。

8. 共感覚の再定義と感性的位相ロック

本論文における「共感覚」は、ある感覚刺激が別の感覚経験を自動的に喚起する神経学的な synesthesia とは区別される。ここでいう共感覚、すなわち共存在的感覚とは、視覚、聴覚、触覚、記憶、情動、思考が相互に開かれ、それらを通じて自己と自己以外が同じ現在を分有していることを感受する能力である。英語では、この概念を co-sensibility と呼ぶ。

人間は感覚器官を失ったのではない。失ったのは、感覚相互の接続可能性と、感覚を自己以外へ開く力である。画面上で像を見ても、その場所の温度、匂い、時間、身体的危険を受け取らない。数値を理解しても、その数値に含まれる個別の生を感じない。こうして感覚は機能していながら、共存在を生成しなくなる。

この状態を「感性的位相ロック」と定義する。知的位相ロックが、既存の合理性の内部でしか思考できず、その枠組み自体を疑えない状態であるのに対し、感性的位相ロックは、既存の認識形式に入らない存在を感じること自体が困難になった状態である。

知的位相ロックと感性的位相ロックは相互に強化する。感じられないものは思考の対象にならず、思考できないものは存在しないものとして感覚から排除される。その結果、認識可能性の境界が実在の境界と誤認される。

9. 個人主義的な縦軸への収縮

共存在の横軸が失われると、存在の縦軸だけが残る。個人は、自らの履歴、資格、能力、成果、評価、将来計画を管理し、自分が何者であるかを自己の内部で証明し続ける。この縦軸は、一見すると自己を強化する。しかし、横軸との交点を失った縦軸は、自らの位置を決定できない。

自己の履歴がいかに長くても、誰と、どこで、何と共にあるのかが失われれば、「いま、ここに在る私」は現れない。自己を絶対化する個人主義は、自己を確実にするのではなく、自己を支えていた他者、場所、自然、文化、死者、未来との関係を不可視化する。その極限において、人間は自分を説明する情報を大量に所有しながら、自分が実在しているという感覚を失う。

自己存在への不信は、単なる心理的症状ではない。それは、自己証明を自己の内部だけで完結させようとする存在論的構造の帰結である。自己は自己だけによって自己を証明できない。自己が在るという感覚は、自己以外から触れられ、それに応答し、その応答によって世界の配置が変わる経験から生成する。

10. 自己外部化、人間以前性、自己以前性

自己外部化とは、自己が言語、作品、制度、技術、行為を通じて自己以外へ現れる運動である。しかし、自己を外部へ投影するだけでは、共存在は成立しない。外部が自己の表象によって占有されるなら、他者は自己の延長へ還元されるからである。

自己外部化の限界において重要になるのが、人間以前性と自己以前性である。人間以前性は、人間一般という抽象に先立って、個別具体的な生命、身体、環境との関係が存在生成を支えていることを示す。自己以前性は、確立した自己同一性に先立って、自己以外との接触と応答が自己を生成していることを示す。

共存在は、この「以前性」が現在において働く形式である。私は完成した自己として他者へ向かうのではなく、他者との接触によって、そのつど私になる。したがって共存在は自己の否定ではない。それは、自己を閉鎖的同一性から解放し、個別性をより具体的に生成する条件である。

11. 言語デリバティブ空間と失われた現在

言語デリバティブ論は、言語が既に存在する現実を記述するだけでなく、未実現の意味、将来の評価、予測された反応を現在へ折り込み、行為を先行的に組織する構造を明らかにする。現代の情報環境では、現在の出来事は、それ自体として経験される前に、見出し、指標、予測、物語、評価へ変換される。

このデリバティブ空間では、遠隔との接続は増大するが、共存在が増大するとは限らない。遠くの出来事は、応答を要求する他者の現実としてではなく、自己の立場、感情、評価を表示するための記号として消費される。未来もまた、開かれた可能性ではなく、予測と管理の対象になる。

こうして現在は、過去と未来、自己と他者が接続する在ではなく、更新され続ける表示面へ変わる。最新性はあるが現在性がない。通信はあるが共存在がない。この分離が、失われた現在の特徴である。

12. 即・座・席・位としての共存在

「即」は、二つのものを媒介項によって後から結合するのではなく、異なるものが差異を保ったまま直接に関係し、そこから新しい位相が生成する契機である。存在と共存在、思考と感性、可視と不可視は、即によって一方へ還元されることなく接続する。

「座」は、この接続を可能にする場の構えである。座は内容をあらかじめ確定するのではなく、異なる存在が到来し、位置を取り、関係を生成できる空間を開く。「席」は、その座のなかにある個別具体的な受容可能性である。空席は欠如ではなく、まだ現れていない他者、未来、死者、自己以外が現在へ作用する余白である。

「位」は、関係のなかで暫定的に生じる位置である。位は身分や固定的序列ではなく、縦軸と横軸がそのつど交差して現実に接地する点である。したがって在は位として生成し、位は関係の変化によって移動する。

共存在的現在とは、即によって接続され、座によって開かれ、席によって他者を受け入れ、位として現実に接地する生成的な場である。

13. 無名性と作品性

共存在におけるすべての関係を、特定の主体に所有物として帰属させることはできない。文化、言語、儀礼、場所は、無数の名のある者と名のない者の行為を継承しながら生成する。誰が最初に始めたのかを確定できなくても、その行為が現在を支え、未来へ渡されることがある。

無名性は、作者の不在や名前の消去ではない。それは、存在生成が個人への帰属を越えて継承される様式である。共存在の横軸は、名を知る他者だけでなく、名を知らない誰か、既に死んだ者、まだ生まれていない者によっても支えられる。

作品性とは、制作物が作者の意図や所有に閉じず、自己以外との関係を生成し続ける力である。作品は、作者を表現する完成物ではなく、別の存在が到来し、異なる仕方で応答できる席を残す。その席が開かれている限り、作品は共存在的インターフェイスとして働く。

14. 芸術による共存在的現在の再生成

芸術の役割は、失われた統一的世界観を復古的に回復することではない。また、呪術や宗教を現代へそのまま復元することでもない。近代以前の共同体には排除や暴力も存在し、共同性そのものを善とみなすことはできない。

芸術が回復するのは、閉じた共同体ではなく、差異を保った存在が同じ現在を分有できる接続可能性である。芸術は、理解できないものを理解済みの対象にせず、見えないものを完全な像にせず、自己以外が自己以外のまま作用する場をつくる。

グラフィティは、作者の身体が不在であっても、痕跡によって都市の現在へ作用する。Web Installationは、離れた場所の閲覧者、画面、通信環境、物理的場所を接続し、作品の存在をアクセスのたびに生成する。民宿狭山美学校は、生活、宿泊、教育、制作、地域、訪問者を分離せず、「あちら」と「こちら」の境界をそのつど生成する現実ディスプレイである。

これらに共通するのは、作品が自己表現の完結ではなく、共存在の契機を創造する点である。芸術は孤立した存在に共存在を説明するのではない。身体、場所、痕跡、余白、時間を通じて、「いま、自分以外が共に在る」という感覚が生じうる条件を構成する。

したがって芸術とは、孤立した存在に共存在を思い出させるインターフェイスである。しかし「思い出す」とは、過去の状態へ戻ることではない。それは、失われていた接続可能性を現在において新しく生成することである。

15. 生成学における共存在の命題

以上の議論から、次の命題を提示できる。

第一に、存在は縦に自己を生成し、共存在は横に世界を生成する。

第二に、「在」は縦軸と横軸の固定された交点ではなく、両者の関係からそのつど生成する位相的インターフェイスである。

第三に、共存在は存在の後に付け加えられる社会的状態ではない。共にあることによって、それぞれの存在が生成する。

第四に、共感とは同じ感情を所有することではない。理解し尽くせない他者の存在によって、自らの現在が動かされうることである。

第五に、共感覚とは感覚の混合ではなく、複数の感覚と複数の存在が差異を保ったまま一つの現在に現れる共存在的感性である。

第六に、科学主義は、局所的因果と説明可能性を実在の唯一の基準とすることで、非局所的な関係を不可視化する。

第七に、横軸を失った縦軸は交点を失い、自己は自らがどこに在るかを確定できなくなる。

第八に、自己存在への不信は、自己の不足ではなく、自己を生成していた共存在的関係の切断から生じる。

第九に、芸術は不可視なものを完全に可視化するのではなく、それが不可視なまま現在へ作用できる席を開く。

第十に、芸術が再生成するのは自己表現ではなく、自己と自己以外が共に在ることのできる現在である。

結論

本論文は、存在を縦軸、共存在を横軸として捉え、「在」を両者が交差する生成的インターフェイスとして再定義した。「存」は時間的持続と継承を、「在」は具体的な現前と現実接地を、「共」は差異を保持した関係的分有を示す。この分節によって、存在は孤立した実体ではなく、時間的継承と関係的感応が交差する出来事として理解される。

現代の科学主義的合理性は、局所的因果、測定可能性、再現可能性を絶対化し、それらに回収されない不可視性、一回性、遠隔性、理解不能性を周縁化する。この認識的閉鎖は知的位相ロックを生み、さらに、認識形式に入らないものを感じることのできない感性的位相ロックを形成する。その結果、人間は大量の情報へ接続しながら、同じ時代のどこかに在る、誰か、あるいは何かの存在を共に感じることができなくなる。

共存在の横軸を失った個人は、自己の履歴、評価、能力、未来だけを縦方向に管理する。しかし横軸を欠いた縦軸には、現在を成立させる交点がない。自己を絶対化する個人主義の極限において、自己は強化されるのではなく、自らの位置と現実性を失う。現代人が自己の存在を信じられないのは、自己について考える力が不足しているからではない。自己以外によって触れられ、自己以外へ応答し、その関係のなかで自らが在ることを感じる力を失ったからである。

芸術、儀礼、宗教空間、痕跡、装飾は、歴史的には異なるが、可視と不可視、現在と遠隔、自己と自己以外を接続するインターフェイスとして比較できる。芸術は理解不能なものを消去せず、不可視なものを完全に可視化せず、それらが現在に作用する席を開く。この席において、思考と感性、存在と共存在、過去と未来が即として接続される。

ゆえに、生成学における共存在の最終命題は次のように表現できる。

私たちが失っているのは、他者についての情報ではない。私たちが失っているのは、他者がいま、自分と共に存在しているという現在である。

そして芸術が生成するのは、孤立した自己の像ではない。芸術が生成するのは、自己が自己以外と共に在ることによって、初めて自己として現れるための現在である。

参考文献

Barad, Karen. Meeting the Universe Halfway: Quantum Physics and the Entanglement of Matter and Meaning. Durham, NC: Duke University Press, 2007.

Bataille, Georges. Lascaux; or, The Birth of Art: Prehistoric Painting. Translated by Austryn Wainhouse. Geneva: Skira, 1955.

Cassirer, Ernst. An Essay on Man: An Introduction to a Philosophy of Human Culture. New Haven: Yale University Press, 1944.

Clottes, Jean. What Is Paleolithic Art? Cave Paintings and the Dawn of Human Creativity. Translated by Oliver Y. Martin and Robert D. Martin. Chicago: University of Chicago Press, 2016.

Dewey, John. Art as Experience. New York: Minton, Balch, 1934.

Durkheim, Emile. The Elementary Forms of Religious Life. Translated by Karen E. Fields. New York: Free Press, 1995.

Gell, Alfred. Art and Agency: An Anthropological Theory. Oxford: Clarendon Press, 1998.

Heidegger, Martin. Being and Time. Translated by John Macquarrie and Edward Robinson. New York: Harper & Row, 1962.

Latour, Bruno. Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory. Oxford: Oxford University Press, 2005.

Lewis-Williams, David. The Mind in the Cave: Consciousness and the Origins of Art. London: Thames & Hudson, 2002.

Merleau-Ponty, Maurice. Phenomenology of Perception. Translated by Donald A. Landes. London: Routledge, 2012.

Merleau-Ponty, Maurice. The Visible and the Invisible. Edited by Claude Lefort. Translated by Alphonso Lingis. Evanston, IL: Northwestern University Press, 1968.

Nancy, Jean-Luc. Being Singular Plural. Translated by Robert D. Richardson and Anne E. O’Byrne. Stanford, CA: Stanford University Press, 2000.

Simondon, Gilbert. Individuation in Light of Notions of Form and Information. Translated by Taylor Adkins. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2020.

Whitehead, Alfred North. Process and Reality: An Essay in Cosmology. Corrected edition. Edited by David Ray Griffin and Donald W. Sherburne. New York: Free Press, 1978.

美学者母（Tomokazu Tanaka）「生成の位相存在論の公理系——存在生成の基礎理論——」Research Memorandum, Version 1.0, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「自己外部化の限界と存在生成——生成の位相存在論におけるインターフェイス存在論——」Research Memorandum, Version 0.9, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「人間以前性と自己以前性——生成の位相存在論における自己証明の存在論——」Research Memorandum, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「言語デリバティブ論——人工知能のハルシネーションにおける逆問題芸術とレバレッジ構造——」Research Memorandum, Version 1.0, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「生活即芸術の存在論——生成の位相存在論から見たバウハウス・ロシア構成主義・日本仏教の構造比較——」Research Memorandum, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「無名性の存在論——作品性・神聖性・文化生成——」Research Monograph Series, Version 1.0, 2026年。

美学者母（Tomokazu Tanaka）「座・席・位相の生成論」Research Memorandum, 2026年。

方法論的声明

——研究覚書の公開に関する方法論的声明——

本稿は、生成の位相存在論（Generative Topological Ontology）の継続的な研究過程における研究覚書（Research Memorandum）として公開するものである。
本稿に示される概念、定義、仮説および議論は、執筆および公開の時点における理論的到達点を記録したものであり、最終的に確定された理論を意味するものではない。これらは、今後の研究、芸術実践、現実との相互作用、学術的対話および査読を通して、加筆、修正、再定義または再構成される可能性がある。
本研究は、完成した理論のみを研究成果とみなすのではなく、概念が生まれ、相互に接続され、変容し、理論として統合されていく過程そのものを重要な研究対象として位置づける。したがって、本稿は未完成な草稿というよりも、理論生成の特定の時点を記録した一つの位相として理解されるべきである。
研究覚書の公開は、完成した理論を先行して提示することを目的とするものではない。それは、思考と実践の生成過程を記録し、後の研究による検証および再構成を可能にするとともに、異なる立場との学術的・芸術的対話へ開くための方法である。
本稿の内容が、後に査読論文、学術書またはその他の正式な研究成果として公表される場合、その完成版は、本研究覚書とは異なる固定された文書として明示される。
本稿を引用または参照する場合は、題名、著者名に加えて、版番号（Version）および最終更新日を併記されたい。異なる版の間には、概念、定義および論証上の相違が含まれる場合がある。
本研究覚書は最終的な結論ではない。それは、生成の位相存在論が形成され続ける過程における一つの到達点であり、同時に、さらなる生成へ開かれたインターフェイスである。